慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハバシュ系解放奴隷の聖者ライハーンとその慈善活動
Sub Title	Notes on al-Shaykh Rayḥān al-Ḥabashī
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.2/3 (2022. 5) ,p.171 (301)- 178 (308)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	短報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220500-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

短報

ハバシュ系解放奴隷の聖者ライハーンとその慈善活動

長谷部　史彦

十六世末から十七世紀初頭に至るオスマン帝国エジプト州の動乱期に関する重要史料の『マバーヒジュ』には、ヒジュラ暦一〇一二年第四月／西暦一六〇三年九―十月に歿した、州都カイロのムスリムの聖者ライハーン al-Shaykh al-Ṣāliḥ al-Muʻtaqad Rayḥān al-Ḥabashī al-Suʻūdī の慈善活動についての貴重な記録が収められている。[1] それは、他の同時代諸史料に全く言及の無い独自の情報であり、中東の慈善救貧史研究の視座から注目すべき内容を備えている。

「ライハーン」とは香草のバジルを意味する。「ハバシー」というニスバ（由来名）は、ハバシュ、即ちエチオピア高原とその周辺諸地域[2]にルーツをもつことを、「スウーディー」というニスバは、スーフィー聖者アブー・アッ＝スウード・ジャーリヒー al-Ustādh al-ʻĀrif al-Shaykh Abū al-Suʻūd al-Jārihī の信徒集団に属していたことを示している。『マバーヒジュ』の著者イブン・アジャミーは、ライハーンがジャーリヒーの弟子たち（aṣḥāb）の一人でスーフィーの導師ファイユーミー al-Shaykh Muḥammad al-Fayyūmī の解放奴隷（ʻatīq）であったと述べている。[3] つまり、ハバシュ系家内奴隷の出身という異色の聖者であったといえよう。『マバーヒジュ』にはさらに次のように記されている。

このシャイフ・ライハーンは、軍司令官たち（ʻumarā）や有力者たち（akābir）に信仰された人（muʻtaqad、聖者）であった。そして彼は、シャイフ・アブー・アッ＝スウードがその中にいる参詣

所（mazār）の、門の楣石（ʿataba）の下に座っていた。[4]

大都市カイロの南部のカラーファ地区で墓廟参詣に励んだイブン・アジャミーは、この「生ける聖者」が同じカイロ南部に所在するジャーリヒー廟の入口に着座していたと述べている。[5]つまり、ライハーンはこの聖廟に仕える者たちの一人であった。ジャーリヒー廟は、フスタートの筆頭集会モスクであるアムル・モスクの北東約五〇〇メートルの地点に位置し、サラーハ・サーレム通りに面して建つアブー・スウード・モスクの一画に現存する。[6]J・C・ギャルサンの研究によれば、ジャーリヒー Abū al-Suʿūd Muḥammad ibn Dughaym al-Jāriḥī（一五二六／二七年歿）は、フスタートの富商の家に生まれた。自ら商店を営みながら、シャーズィリーヤ教団系スーフィーのアフマド・マルフーミーの弟子となって禁欲的修行を重ね、やがて「生けるスーフィー聖者」として人々の信仰を集めるようになった。崇敬者にはマムルーク朝の有力軍人が多く、一五〇八年にはスルターンのガウリー（在位一五〇一―一六）もフスタートのジャーリフの丘にある彼のザーウィヤ（修道場）を訪問した。同王朝最後のスルターンとなったトゥーマーン・バーイ（在位一五一六―一七）の不承不承の即位をめぐっても、聖者ジャーリヒーの勧告が有効であったとされている。[7]

他方、F・デ・ヨングの一九七〇年代初頭の調査によると、当時のカイロにおける聖廟参りの慣行では、金曜がイマーム・フサイン、土曜がフサインの子のスィーディー・ザイン・アル＝アービディーン、日曜がサイイダ・ナフィーサ、月曜がサイイダ・ファーティマ・ナバウィーヤ、火曜が聖者ジャーリヒー、水曜が聖者アバータ Shaykh ʿAbāṭa、木曜が聖者ダムルダーシュ Sīdī Damurdāsh al-Muḥammadī の参詣日とされていた。このうちジャーリヒーは、特に子授けの御利益があるとして階層を問わず女たちの信仰を集めていたという。[8]

ところで、同時期のダマスクスで集成されたガッズィーの『夜話の優美』には、ライハーン・ハバシー Rayḥān ibn ʿAbd Allāh al-Ḥabashī al-Aḥmadī al-Shāfiʿī という名の人物の小伝が載録されている。[9]ニスバにアフマディーヤ教団とシャーフィイー学派への帰属が読み取れるこのシャイフは、「至高なるアッラーについて知る者（ʿārif bi-Allāh taʿālā）」、即ちスーフィー聖者であり、「クバー・モスク Masjid al-Qubāʾ の北方において、高貴なるムハンマド廟（ḥujra）のムジャーウィル（聖域逗

留者）」であったという。ガッズィーは一〇一二年第一月／一六〇三年六―七月に子のバドルッディーンと共にこのシャイフを訪問し、その際、ガッズィーの求めに応じてシャイフはバドルッディーンにイジャーザ（修了証書）を授け、アフマディーヤ教団のヒルカ（khirqa スーフィーの導師が弟子に与える衣）を着せ掛けたという。その後、ガッズィーは一〇一四年第一二月／一六〇六年四月にハッジ巡礼を行い、その帰路にメディナに立ち寄った際、南郊のクバー・モスクの地で彼と再会し、聖地メディナの法官（qāḍī al-Madīna）だったアブドゥッラフマーン・エフェンディ ʿAbd al-Raḥmān Afandī がこのシャイフのために改築したミスリー門 Bāb al-Miṣrī の古いモスクやその隣のシャイフの邸宅で歓待を受けた。ガッズィーがこのシャイフと別れたのは一〇一五年第一月一七日／一六〇六年五月二五日かその翌日のことで、同年／一六〇六年五月―一六〇七年四月のうちにシャイフの訃報が彼のもとに届いたという。つまり、このメディナ在住のシャイフ・ライハーンが死去したのは一六〇六年五月末から一六〇七年四月までのある時点のことであり、同時代を生きた同名の聖者ではあるが、本小論が注視する一六〇三年九―一〇月に死去したカイロ在住のライハーン・ハバシーとは別の人物であったと推断される。さらに、死亡の時期のみならず、カイロのジャーリヒー廟に常駐したライハーンについてメディナでの居住やアフマディーヤ及びシャーフィイー学派との関わりを伝えた記述が無いこと、メディナのライハーンについて解放奴隷であったとする記載が無いことも、両者が別人であったことの傍証となろう。

『マバーヒジュ』には、本稿で扱うライハーンがジャーリヒー廟の入口に常在していたことを伝える先の引用記述に続いて、その独特の活動を描出した以下の詳述がある。

彼は毎年上エジプト地方へ旅をして軍司令官たちや有力者たちと会い、彼らはスィーディー・アブー・アッ＝スウードの御名の上に恩寵を求めて、穀物（ghilal）をもって彼に慈善を為していた。そこで彼は、穀物、レンズ豆（ʿadas）、焙煎青小麦（farīk）、藍植物（nīla）などを積んだ船（markab）でフスタートへと戻ってきた。そして、彼がフスタートの穀倉群（shuwan）の下に到来した時、スルターンの穀倉の管理官たち（umanāʾ al-shuwan al-sulṭāniyya）は誰一人として彼を妨げることがなかった。

そこで、彼は小麦を売却すると、その代金を水曜と金曜にクルアーンの全章朗誦をする読誦者の一団のために作る食事（ṭa'ām）に費やし、彼らに手当として支払い、また、貧者たち（fuqarā）、寡婦たち（arāmil）、隠棲者たち（munqaṭiʿūn）などへのサダカとしていた。そして、彼は多年に亘ってそれに専念したのである。[10]

つまり、フスタートのジャーリヒー廟に仕えていたライハーンは、毎年おそらくは冬作物の収穫後に上エジプトに足を運び[11]、かの地にいる聖者ジャーリヒーを尊崇する有力軍人や地方有力者たちから現物の施しを集め、川船に積んでフスタート港に持ち帰り、その売上金でクルアーン読誦者たちへの施与と手当の支給、さらにはサダカ（任意の喜捨）を実践していたのである。この記述から導かれる考察として、以下の五点を挙げておきたい。

第一に、ジャーリヒーに対する聖者崇敬が州都に限定されず、エジプト南部への広がりを示していた点である。この著名な「死せる聖者」の恩寵を求め慈善（iḥsān）として農産物を供出した上エジプトの「有力者たち」には、アラブ部族の族長や村落有力者なども含まれていたと推察される。そして、マムルーク朝末期にみられた有力軍人たちのジャーリヒー信仰が、オスマン帝国治下のこの時期にも存続していたことも確認される。

第二に、聖者ジャーリヒーのシャファーア（執り成し）による唯一神の恩寵を求め、その廟の奉仕者でジャーリヒーの孫弟子に当たる「生ける聖者」に供された農業生産物の多様性、そしてその換金手法である。施された農産物は上エジプト産の穀物・レンズ豆・焙煎青小麦・藍植物（マメ科コマツナギ属）等であったが、ライハーンがフスタートで売却したことが明記されているのは主穀の小麦のみであり[12]、それ以外の農産物をライハーンがどう用いたのかは不明である。しかし、少なくともその一部は換金され、慈善活動やジャーリヒー廟の運営の資金とされたと推測される。大河ナイルを通じて上エジプトと深く結びついたカイロ南部の主要港へと運び込んで小麦を売却したのは、地方に比べ高値での取引が期待されたからであろう。[13]そして、ライハーンの活動拠点で、上エジプトの施与者たちによる寄贈行為の対象であったジャーリヒー廟がフスタート北部に所在した事実を考え合わせれば、この売却地の選択は自然な成り行きであったようにみえる。

第三に、フスタート港のスルターンの穀倉の管理官た

ちが、聖者ライハーンによる農産物の持ち込みを容認したことに言及している点が注目される。ライハーンは寄贈された農産物をフスタート港の「穀倉群の下」に運び込んだ。この動きに対して、フスタートの「スルターンの穀倉群」の管理官たちは不介入の姿勢をとり、ライハーンはこの河港で上エジプト産小麦を自由に売却できた。イブン・アジャミーがスルターンの穀倉の管理官たちに敢えて触れているのは、当時彼らがフスタートの穀物河岸を統制する強い権限を有していたからと考えられる。[14] そうした管理統制が聖者の慈善的活動には及ばないということを、聖廟参詣に励んだ歴史家は好意的に受け止めていたのではないだろうか。

第四に、聖者ライハーンによる慈善行為の対象者たちである。水曜・金曜のイトゥアーム・アッ＝タアーム（食事の無料支給）と手当を受けるクルアーン読誦者たちの活動の場に関する言及はないが、聖者ジャーリヒーの恩寵を希求しての寄贈の品を利用していたことを思えば、ジャーリヒー廟の聖典読誦の担い手たちとみてよかろう。また、サダカの対象者のうち「貧者たち（fuqarā）」は、社会経済的な諸事情による貧困者とスーフィズムの修行に勤しむ自発的貧者の双方を含み得る。後者は、閑居して専ら唯一神に向かう「隠棲者たち」と同類といってよかろう。また、「寡婦たち」への施しは、前述のように女性たちの信仰を集めてきたとされるこの聖者廟の特徴とも関わる救貧実践といえよう。

第五に、「生ける聖者」が現実の行動力や経営手腕を充分に備えていたとみられる点である。ライハーンはおそらく補助員も随伴して上エジプトに赴き、川船を仕立てて、[15] 寄贈された農産物をフスタートへと持ち込んだ。農産物の売却に際しては取引の知識・経験・交渉能力、さらには相場への敏感さなどが必要とされ、また運輸・交易に関わる人的ネットワークも有していたとみるべきであろう。この奴隷出身のフスタートの聖者には、慈善と市場の両経済の結界で活動するアクターとしての一面があったといえよう。

『マバーヒジュ』のライハーンに関する記述は、次のような内容で結ばれている。彼が死去すると、詳しい地点は不明だがフスタート Miṣr al-Qadīma の中で葬儀礼拝が行われ、遺骸はジャーリヒーのザーウィヤへと運ばれ、導師のアリー・アル＝ハリーク al-Shaykh ʿAlī al-Ḫaliq の墓の傍らに葬られたという。この導師について、イブン・アジャミーは欄外に「ジャーリヒーの弟子たち

の一人（aḥad aṣḥāb sayyidī Abī al-Suʿūd）」と追記している。[16] ガッズィーの『流星 *Kawākib al-sāʾira*』には、九三四／一五二七―二八年頃に歿したアリーという名をもつジャーリヒーの後継者（khalīfa）の伝記が収載されている。しかし、このアリーのフルネームは ʿAlī ibn Muḥammad al-Sayyid ʿAlāʾ al-Dīn al-Ḥusaynī al-ʿAjlūnī al-Burūsawī al-Ḥadīdī であり、「剃られた人（al-ḥaliq）」という綽名も記されていないので、同一人物と断定することはできない。[17] いずれにせよ、このザーウィヤ／廟の慈善・救貧活動に尽力した聖者ライハーンは、死後その一画に埋葬され、この宗教施設の聖性強化にも一役買ったとみてよかろう。そして、中近世イスラーム世界における多様なザーウィヤの慈善・救貧機能に関する綜合的研究は未だ大きな課題として残されている。

註

（1）Ibn al-ʿAjamī, *Mabāḥij al-ikhwān wa manāhij al-khillān fī ḥawādith al-dahr wa al-azman*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient, A1631［以下、*Mabāḥij al-ikhwān* と略記］, fols. 126v-127r. 未活用の史書『マバーヒジュ』とその著者イブン・アジャミーについては、拙稿「計量と歴史記述―イブン・アジャミーに関する基礎的考察（一）」『史学』八九巻一・二号（二〇二〇年）、一―五四頁を参照されたい。スーフィズムと聖者信仰に関する研究は枚挙に暇がないが、当該期エジプトに関しては、Michael Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule, 1517-1798*, London: Routledge, 1992, pp. 124-178; Eric Geoffroy, *Le soufisme en Egypte et en Syrie sous les derniers Mamelouks et les premiers Ottomans: Orientations spirituelles et enjeux culturels*, Damas: L'Institut Français d'Etudes Arabes de Damas, 1996; Rachida Chih, *Safism in Ottoman Egypt: Circulation, Renewal, and Authority in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, London: Routledge, 2019; Tayeb Chouiref, *Soufisme et hadith dans l'Égypte ottomane: ʿAbd al-Raʾūf al-Munāwī (952/1545–1031/1622)*, Le Caire: Institut Français d'Archéologie Orientale, 2020 を参照のこと。

（2）ハバシュ或いはハバシャは、エチオピア高原及びその周辺域を指す地域名称であり（C. F. Beckingham et al, "Ḥabash, Ḥabasha", *Encyclopaedia of Islam, Second Edition.*）、ハバシュ出身者の多くは宦官奴隷としてエジプト等に運ばれた。マムルーク朝期のハバシー、特にハバシー宦官については、Carl F. Petry, "From Slaves to Benefactors: The Ḥabashīs of Mamlūk Cairo", *Sudanic Africa*, 5 (1994), pp. 57-66 を参照のこと。ペトリーはハバシーの出身地をソマリアからチャド湖までの「東スーダン」と広めに捉えている。

（3）*Mabāḥij al-ikhwān*, fol. 126v. ファイユーミーについて

の情報は現時点で他の史料からは得られていない。ライハーンは宦官にもよくみられるイスム（個人名）だが、イブン・アジャミーはこのシャイフ・ライハーンが宦官であったとは記していない。

（4） *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 126v–127r.

（5） カラーファ地区などカイロ南部区域に関する本史料の豊富な歴史情報に基づく一考察として、拙稿「一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式―『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書」『史学』八八巻二号（二〇一九年）、一―二二頁を参照されたい。

（6） 同モスクは建設活動に並外れて熱心であったカーズダグリーヤの有力軍人アブドゥッラフマーン・カトフダーによって一一七六／一七六二―六三年に附設されたとみられる。André Raymond, “Les constructions de l’émir ʿAbd al-Raḥmān Kathudā au Caire”, *Annales Islamologiques*, 11 (1972), pp. 246–247を参照のこと。

（7） Jean-Claude Garcin, “Deux saints populaires du Caire au début du XVIe siècle”, *Bulletin d’études orientales*, 29 (1977), pp. 131–137.

（8） F. De Jong, “Cairene Ziyâra-Days: A Contribution to the Study of Saint Veneration in Islam”, *Die Welt des Islams*, New Series, 17–1/4 (1976–77), pp. 26–43.

（9） 以下、本段落はAl-Ghazzī, *Luṭf al-samar wa qaṭf al-thamar min tarājim aʿyān al-ṭabaqa al-ūlā min qarn al-ḥādī ʿashar*, 2vols., Damascus: Wizārat al-Thaqāfa wa Irshād al-Qawmī, 1981, vol. 2, pp. 463–464に拠る。この伝ハバシュ系解放奴隷の聖者ライハーンとその慈善活動記集史料とその聖者関連諸情報については、拙稿「『夜話の優美』にみえるダマスクスのマジュズーブ型聖者」山本英史編『アジアの文人が見た民衆とその文化』慶應義塾大学言語文化研究所、二〇一〇年、二一三―二三四頁を参照されたい。また、少し後代のムヒッビー著『事蹟の抜粋 *Khulāṣat al-athar*』にもガッズィーの当該記事の要約が収載されている。Al-Muḥibbī, *Khulāṣat al-athar fī aʿyān al-qarn al-ḥādī ʿashar*, 4 vols., Cairo: al-Maṭbaʿa al-Wahbiyya, 4vols., 1867–1868, vol. 2, p. 172を参照のこと。

（10） *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 127r.

（11） 但し、藍植物はエジプトの夏作物であった。佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』山川出版社、一九八六年、二六九頁を参照せよ。

（12） 引用文中にみえる「穀物 ghilāl」という語は小麦（qamḥ）を指すこともある。

（13） ここで想起されるのは、カーイトバーイ（在位一四六八―九六）がダミエッタに設立したアシュラフィーヤ学院のワクフの指定内容である。そこにおいても、ワクフ地である上エジプトのビブラーウ村からの現物収益であるソラ豆等を地方ではなく、フスタートの市場で換金することが指示されていた。詳しくは、拙稿「中世エジプト都市の救貧―マムルーク朝スルターンのマドラサを中心に」『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、六八―七九頁を参照されたい。

（14） 「スルターンの穀倉群」とその管理官については、差し当たり拙稿「一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総

督と祈願式―『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書」『史学』八八巻二号（二〇一九年）、四―五頁と注一六、及び「一七世紀初頭カイロのハワージャー―『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書」『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』三五号（二〇二〇年）、二七九頁を参照されたい。フスタート港に置かれたこの穀物貯蔵施設の機能や運営の実態解明は今後の重要課題である。

(15) オスマン帝国期における川船を用いたナイルの水運については、'Abd al-Ḥamīd Ḥāmid Sulaymān, *al-Milāḥa al-Nīlīyya fī Miṣr al-'Uthmānīyya, 1517–1798*. Cairo: al-Hay'a al-Miṣrīyya al-'Āmma li-al-Kitāb, 2000 を参照のこと。

(16) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 127r.

(17) Al-Ghazzī, *al-Kawākib al-sā'ira bi-a'yān al-mi'a al-'āshira*, 3vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1997, vol. 2, p. 198.